

第12回

書道監修・執筆 青山浩之

木簡に書いてみよう ～隸書～

今回学ぶこと

これまでさまざまな書体にチャレンジしてきた。今回は「隸書」を学ぶ。隸書は普段使うお札の文字にも使われていて、日常的に目にしているものだ。隸書が誕生した頃、文字を書く材料とされた「木簡」や「竹簡」に実際に書いてみて、その書法の秘密を探り、臨書を通して特徴的な筆使いにも挑戦する。また、硯の作られ方、扱い方も学ぶ。

学習前チェック！用語の意味を確認しておこう

書体／秦時代／漢時代／筆使い／起筆・送筆・収筆／
逆筆・蔵鋒／リズム／硯／墨／煤・膠

木簡・竹簡に文字を書こう！

秦時代に正式な書体であった篆書を、書きやすく簡略化して生まれたのが隸書。その後、漢時代に正式な書体となった。今から2000年以上前、隸書が誕生したころは、紙が普及しておらず、木や竹を短冊型に削り、文字を記した。これを木簡・竹簡と呼ぶ。隸書はこの木簡・竹簡に書かれるなかで発展した。

前漢時代に木簡に隸書で書かれた「居延漢簡」*を見ると、起筆が逆筆（あるいは蔵鋒ともいう）で書かれていることが分かる。木や竹は、木目や繊維が縦に走っているので書きにくい。起筆を逆筆で書くと筆に弾力が生まれ、書きやすくなる。木目に筆をとられないようにリズムよく書くのも大切。こうして木や竹に書きやすい書き方がそのまま隸書の筆使いになった。

今回のお手本

(集字・拡大)

居延漢簡
(前漢時代 前62年)曹全碑
(後漢時代 185年)

(拡大版は37、38ページ参照)

*「居延漢簡」：1930年、スウェン・ヘディンを団長とする探検隊によって中国の居延地方で発見された。伸びやかで大胆な波磔が特徴。

「隷書」の臨書

漢時代に石碑に刻まれた「曹全碑」を臨書してみよう。曹全碑は後漢の中平2年（185年）に、曹全という人物の功績をたたえるために建てられた。清らかに流れ出るような波勢と緊密な点画の構成に特徴があり、洗練された美しさを持つ隷書の傑作といわれる。

波勢とは、波打つようにゆったりとした自然なリズムで書くことをいい、長い横画の収筆などに見られる「波磔」と呼ばれる筆法にそれが表れている。また、隷書の横画は水平に、間を詰めて書かれており、字形が扁平になるのも特徴。扁平な字形と伸びやかな波磔を意識して、ゆったりと気持ちよく書こう。

硯のできるまで

硯には、日本産の「和硯」と、中国産の「唐硯」がある。硯の原料は主に自然石。板状に割れる硬くて緻密な自然石を採掘し、硯の大きさに切ったものをノミで粗彫りしたあと、丁寧に仕上げる。飾り彫りがされた硯もあり、見て楽しむという魅力もある。扱うさいには、貴金属や腕時計で硯を傷つけないように気をつけたり、高く持ち上げないようにすることが大切。手入れにも気を配りたい。硯のくぼんだところを「海」といい、平らなところを「陸」という。陸は墨を常に磨りやすくするために、煤や膠をしっかりとふき取っておくようにする。磨りにくくなった硯は、陸に砥石をかけて手入れをすることもある。硯は自分の手で育てていくような気持ちで大切に使うようにしよう。

達人からひとこと！

隷書は、自然なリズムで伸びやかに書くことが秘訣。手や腕だけで書こうとせず、身体全体を使うような気持ちで大らかに筆を運んでみよう。ゆったりとした心地よさが感じられるようになれば上達した証拠！

隷書は、その装飾性から、現代でも新聞や書籍の題字、表札、看板などに用いられている。今回学習した隷書を、自分でも年賀状やポスターの題字などに生かして、使ってみよう。書が生活に生きることを実感し、生活の中で書を楽しむことの大切さにも気づけるはずだ。



達人

青山浩之

居延漢簡



(拡大)

曹全碑



(集字・拡大)

Handwriting practice lines consisting of ten horizontal lines with a dashed midline, intended for copying the characters from the image.